

東海 の 古 代

第196号 2016年12月

会長 : 竹内 強 副会長・発行 : 林 伸禧
編集 : 石田敬一 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
HP : http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

九州古代史探訪旅行 その1

安城市 山田 裕

はじめに

今回はこれまでの九州旅行と違い、約4か月の長期の探訪旅行を計画した。ところが、4月14日、16日に発生した熊本大地震によって計画を大幅に修正することになった。熊本県内の装飾古墳探訪を取りやめ、小郡市内の上岩田遺跡、福岡市の津屋崎古墳群を中心とする活動となったが、多くの協力者の援助を受け、効率的に巡ることができた。探訪旅行に加えて博多山笠・石橋美術館・大牟田市の世界遺産である炭鉱遺産群の見学と妻からの宿題である「大矢野氏の家紋の謎」を解明する旅でもあった。

今回から数回にわたって、九州の古代史に関わる謎や疑問、ノン天気な仮説に挑んだ旅行記として報告する。

謎と疑問

九州の神話群は、出雲神話とは違い多くの女神が登場する特異性を持っている。

この女神たちは二つのグループを形成しており、一つは『記紀』が記す女神たち、二つは『記紀』に登場しない女神たちである。

さらに『紀』は、亦の名を持つ女神たちが数多く記す特異性を持っている。

この二つの特異性から九州の古代においては、「政治集団の中心に女神（女王）たちが君臨していた」と考えられる。その好例が『魏志』倭人伝が記す「俾弥呼」である。俾弥呼は古代のシャーマンであり、女王であったが、彼女は何を依代として祈っていたのであろうか。

また、俦弥呼以外の女神たちも何を依代としてその権威を確立していったのであろうか。さらに、その権力を支える基盤は経済力（海・舟運力や農業生産力）だけではなく、それぞれに政治集団が存在したはずである。

ところが、『記紀』はこれらの記述に乏しく謎として現在まで続いている。

また、古代史の通説に対する疑問も私の頭の中では十分に整理できていない。本論は、“神社考古学”を主催されていた百嶋由一郎氏（神社古代史研究者、1927～2013年）の肉声によるDVDなどを参考に迫ってみたい。

1. 住吉神社が祀る住吉三神とは誰か

私たちは、ふだん住吉神社のご祭神を「住吉三神」や「住吉さん」と呼んでいるが、神として崇められたモデル（人物）について多くの人は考えたこともないのが本当のところであろう。

住吉三神に関して、『記』には「神功皇后の御子は男子なり」と予言する神として記されている。他方、『紀』本文で「神功皇后に啓示を与える神々の一柱」とあり、また一書は「宝の国を授ける神」として記す。

神功皇后の役割について、『記』は「神よせのために琴を弾く」、『紀』本文は「自ら神主と

なり、神よせのために琴を弾く」と記している。すなわち、両書は神功皇后を『魏志』倭人伝が記す俣弥呼を意識して記述したと推測できる。

「日佐住吉神社」のHP (<http://kamisamahoto.kesama.com/archives/jisha/99>) には、明治の始めに松田敏足氏によって書かれた「日佐住吉神社御由来考」が示され、「筑紫国。那の津口に宮家が造営されてより、中国大陸や朝鮮半島との外船の往来することになり、日佐はその応接の要地であったため、その航海の安全や鎮守の神として筑前那珂郡に住吉三社が居かれ、当社は、その中津瀬の神として祭られたもので、その起源は宣化天皇の御宇（536年）の前後」と記されている。

この住吉三社とは、①筑紫郡那珂川町の現人神社、②福岡市南区日佐町の日佐住吉神社、③福岡市博多区の住吉神社の三社のことである。住吉神社の元宮は、①の現人神社（別名住吉神社本津宮）であり上宮と呼ばれており、③の博多区の住吉神社は下宮と呼ばれている。

（1） 現人神社

現人神社のご祭神は、次のとおりである。

- ・主祭神：底筒男命・中筒男命・表筒男命
- ・相殿^{*1}：神功皇后・級長津大神・安徳天皇

序列最上位の主祭神の底筒男命は相殿の神功皇后と対応し、中筒男命は級長津大神^{*2}と対応しているが、表筒男命は安徳天皇と対応していない。安徳天皇とした理由は、源平合戦の屋島の戦いから無事逃れ、那珂川町で住まわれたとする地元伝承が影響していると思われる。

「現人神社略縁起」によると、同社のご祭神は、“都怒賀阿羅斯等命”で、意富加羅国の王子で垂仁天皇の時代に新羅の姫神（比咩語曾神）の後を追って、この地に御鎮座したとある。

したがって、本来の主祭神は都怒賀阿羅斯等命^{みこと}と考えられる。故百嶋氏は、ツヌガアラシトとは、自称神武天皇を名乗った贈崇神天皇であると指摘している。「贈」とは、正当な天皇ではなく、後世に名を贈られた天皇の意味である。なお、同社のご神紋は「右三巴」である。

（2） 日佐住吉神社

日佐住吉神社のご祭神は、底筒男命・中筒男命・表筒男命の住吉三神のほか「香椎大神・若大神・高良神」である。

同社の由来「中津瀬」から、中筒男命が住吉三神の主神と考えられる。社名「日佐」とは、通訳の意である。

（3） 住吉神社（福岡市博多区）

福岡市博多区の住吉神社のご祭神は、「主祭神：底筒男命・中筒男命・表筒男命三神」を総称して住吉三神という。また、「相殿：天照皇大神・神功皇后」、「主祭神・配祀神」を総称して住吉五所大神としている。ご祭神の配置は見ることが出来ないが、底筒男命が序列最上位と推測される。相殿（主祭神の後見人）は底筒男命に天照皇大神、中筒男命に神功皇后が配されているが、何故か表筒男命の後見人が不在である。後述の住吉大社とは、主祭神と相殿の配置が相違し、違和感がぬぐいきれない。

同社の関係者の方にご祭神について尋ねたところ、南北朝の動乱をはじめとして多くの戦いで何度も火災にあい、由緒・縁起の類は失われ、ご祭神の配置もよくわからないとの回答であった。同社はおよそ1200年前に現人神社から分霊し、那珂川町の現人橋付近から現在地に移動したとされている。なお、同社のご神紋は「十六弁菊」である。

（4） 住吉神社（下関市）

下関市の住吉神社のご祭神は、次のとおりである。

- 第一殿：住吉三神（表・中・底筒男命）
- 第二殿：応神天皇
- 第三殿：武内宿禰命
- 第四殿：神功皇后
- 第五殿：建御名方命

序列最上位は住吉三神であることが確認できる。なお、同社のご神紋は博多の住吉神社同様、「十六弁菊」である。

*1 相殿：相殿とは主祭神の後見人

*2 『記』では志那都比古神、『紀』は級長津彦命と記される風の神、“百嶋神社考古学”では天忍穗耳命、またの名海幸彦

(5) 住吉大社(大阪市住吉区)

大阪市住吉区の住吉大社のご祭神は以下のとおりである。

第一本宮：底筒男命

第二本宮：中筒男命

第三本宮：表筒男命

第四本宮：神功皇后

序列最上位は底筒男命である。『住吉神社神代記』によれば、神功皇后と住吉大神は「密事」があり、俗に夫婦になったとの伝承(住吉大社神代記-Wikipedia)がある。「密事」とは穏やかでないが、『記紀』が記す神功皇后の夫仲哀天皇が住吉大神ではないことを暗示している。

以上のことから、住吉大神は、序列最上位の底筒男命の可能性がうかがえ、また住吉大神と神功皇后の関係が、現人神社のご祭神と対応していることにより、底筒男命すなわち住吉大神は、神功皇后の夫であり、同社のご神紋「横木瓜＝花菱＝門光」からも天皇クラスの可能性が濃厚である。

百嶋由一郎氏によれば、神功皇后は最初贈仲哀天皇と結婚したが一年ほどで別れ、次に第九代の開花天皇、亦の名底筒男命と結婚したと指摘し、その証左として裂田神社(裂田の溝を顕彰して同社が建てられた)に神功皇后と開花天皇が祀られており、同社の縁起にも記されていると指摘している。

大宰府地名研究会の中島茂氏と裂田神社を訪れたところ、神功皇后は祀られているものの、開花天皇を祀っている痕跡は認められなかった。また、同社の縁起は管見に見えない。

百嶋氏は、『高良玉垂宮神秘書』にある「高良大明神(底筒男命)は神功皇后と夫婦なり。表筒男命は豊姫と夫婦なり。」の記事を取り上げ、底筒男命は開花天皇であると指摘しているが、底筒男命が具体的に開花天皇であるとの記述は見当たらない。

おそらく、同氏は現代まで秘密にされていた事柄を公開すると多くの支障・迷惑が及ぶことを懸念し、我々に手がかりだけを与えていると思われる。

次回には、同氏が一部の人に公表した「神々の系図平成12年考」を中心に検証してみたい。

前田家『二中歴』の経緯と年代歴「欠字」について

一宮市 竹島正雄

1. はじめに

『二中歴』は鎌倉時代初期の健保六(1218)年に公家貴族に必要な知識に関する名目を百科全書風に類聚編纂された事典である。

前田育徳会尊経閣文庫は加賀前田家に伝来した典籍・古文書等を保存、管理している。その中に2種類の写本『二中歴』が所蔵されている。

一つは鎌倉末期に写されたとされる「古写本十三帖」(以下、前田家古写本という)と、もう一つは元禄十四(1701)年に写本された「新写七冊本」(以下、前田家新写本という)である。

これら二つの写本『二中歴』が加賀前田家に所蔵されるに至った経緯を探り、「年代歴」に記載された九州年号の後書部にある「欠字」の補填について推考する。

参考文献は『日本歴史』600号(1998年5月、吉川弘文館)掲載の橋本義彦著(前田育徳会尊経閣文庫専務理事)の「前田綱紀の『二中歴』考閲」を使用した。(当文献はH28.8.21の林伸禧氏資料による)

2. 前田家写本の所蔵経緯

(1) 前田家新写本

① 新写本の経緯

加賀藩五代藩主前田綱紀は、元禄十四(1701)年に大炊御門家所蔵の『二中歴』三冊を借りて、侍臣山本基庸に模写させた。

三冊のうち、年代歴以下を収める第二巻は綱紀が既に所持していた「家本」にあったが、神代歴以下の諸歴を収める二冊は所持していなかった。

この時の写本二冊が前田家新写本七冊の第一、二冊となった。新写本の残り五冊が綱紀所持の「家本」である。

それはどのような本であったのであろうか。

② 家本「実暁本」

綱紀の手記『桑華書志』に手書きの『二中歴』

内容一覧があり、その中に「実暁本」の名が見える。

この「実暁本」とは、弘治三(1557)年十二月に興福寺光明院権僧正実暁が同修南院光尊から広橋家本を借りて筆写したものであり、前田家古写本の第二～六と同内容の五冊である。また、天理図書館所蔵の『二中歴』五冊はこの「実暁本」であり、江戸初期以降の『二中歴』写本の多くは「実暁本」の模写とされている。

つまり、前田家新写本七冊は、大炊御門家本二冊と実暁本五冊ということになる。

(2) 前田家古写本

① 古写本の経緯

- i. 宝永四(1707)年、前田綱紀の許に三條西家より「三条旧本十四冊」が届いた。その内の七冊は前田家蔵本と同じであったが、残り七冊は無かった。ここで言う蔵本七冊とは先の「新写本七冊」のことである。
- ii. そこで、綱紀は蔵本に無かった七冊の書写はもとより、蔵本にあった七冊も文字その他書様が異なるので注意書きを付けるよう指示した。
- iii. だが、“手間なら全部書写し、書写が終わったら修復して表紙を補って、返納せよ”と指示した。
- iv. 更に、書写後は“通常の冊本に仕立てよ。書写に当たっては、透写して筆勢を似せる事をしなくてよい”としたのである。

結局、書写は全て行われ、全十四冊となった。ところが、前田家古写本は十三帖である。

次に、なぜ、この書写された「十四冊」が「十三帖」となったかを推考する。

② 古写本十三帖の理由

綱紀の手記『桑華書志』の『二中歴』内容一覧の概容は次のようである。

- i. 巻一は『二中歴』の表題だけある。
- ii. 巻二～六について、[実暁本 三条旧本同之]とある。
- iii. 巻七～十三について、[三条旧本]とある。
これを解すると巻二～六の五冊は実暁本と三条旧本で同じであり、巻七～十三の七冊は三条旧本であるとしており、十二冊(帖)は明白にな

った。

すると、問題は巻一である。前田家新写本は大炊御門家本二冊と実暁本五冊であり、iiより巻二～六は同じであるので、巻一はこの大炊御門家本二冊と同じと考える。

つまり、三条旧本の一冊目、二冊目が前田家古写本第一巻に纏められたのであり、三条旧本十四冊が前田家古写本十三帖となったのである。参考文献の著者・橋本義彦氏が“前田家新写本の第一、二冊を前田家古写本第一と対照すると、内容はほぼ一致する”としているので間違いはない。

3. 『二中歴』年代歴の「欠字」について

(1) 前田家古写本の「欠字」と新写本

今、私たちが閲覧できる『二中歴』は、前田家古写本、国立国会図書館本である。

前田家古写本は三条西家旧本十四冊の書写本で、八木書店出版「尊経閣善本影印集成」により見ることができる。

一方、国会図書館本はインターネットにより、「国会図書館本デジタルコレクション」から見ることができる。

① 国会図書館本

この国会図書館本は、明治10(1887)年6・7月に小杉相邨(杉村)氏が前田家古写本を影写したもので、接縫脱落した所や闕亡した所を前田家新写本によって追校し完備させたものである。

問題の「欠字」とは、『二中歴』第二巻、年代歴の九州年号列記載項の後書部にある虫食いによる判読不能な箇所のこと、それは次の文中にある。

已上**百八十四年々号卅一代**〔 〕**年号只有人傳言自大寶始立年号而已**

この欠字〔 〕部は前田家古写本では判読不能であるが、国会図書館本では〔不記〕と判読できる。

小杉氏が古写本の判読不能部に〔不記〕と記入した理由は二つ考えられる。

一つは、国会図書館本は、前田家古写本の影写であるので、古写本の〔 〕部も〔不記〕であったが、影写後に虫食いが進んで判読不能となった。

二つ目は、小杉氏が古写本の接縫脱落や闕亡を新写本で補ったと言っている。因って、古写本は虫食いで判読不能であるが、新写本には〔不記〕とあったので、影写本に〔不記〕と記入した。

この〔不記〕記入は、後者の理由よると考える。

更に、小杉氏は小杉楯邨影写識(改定史籍集覧23冊『二中歴』251頁：林伸禧氏資料よる)に「先年友人が齎した神代人代…(略)…に至る殘闕二本と第四本の二冊を見たことがあり、又淺草文庫に於いて神代歴より公卿歴に至る二本と第二三四五六の七冊を借覧したことがある」としており、これ等にも〔不記〕の記載があり、自信を持って〔不記〕としたと考える。

つまり、前田家古写本では〔不記〕とは判読できないが、新写本には〔不記〕とあった。

② 〔不記〕の記載は何時からか

前田家新写本で〔不記〕と記載されているのは実暁本であり、それは広橋家本の写本である。

広橋家本とは、興福寺修南院光尊の兄・広橋兼秀が買得した『二中歴』の写本である。光尊はそれを弘治三(1557)年8月に京都の兄の家で披見して、奈良に持ち帰った。

同年12月に実暁は、その広橋家本十三帖を光尊から借りて書写した。しかし、光尊から年内に返却するように催促されたため、第二～六帖までの5冊のみの書写で終わった。これが実暁本と言われるものである。

つまり、〔不記〕と記載された『二中歴』の写本ができたのは、1557年以前であることが分かるが、前田家古写本の基になった三条西家旧本が鎌倉時代末期(1330年前後)の写本であるので、それ以降という事になるが、いつ頃かは分からない。

(2) 前田家古写本の「欠字」

では、前田家古写本の虫食い判読不能部にはどのような文字が書かれていたか。

この部分のスペースをその前後の文字の大きさと比べると一文字分であることが分かる。

そして、その4分割の左下部、即ち字体偏部に於いて「口」が読み取れる。小杉氏は前田家古写本のこの部の「口」と前田家新写本及びそ

れ以外の写本を見て〔不記〕と記入したのであるから、ここに入る一文字は〔不〕ではなく、字体偏部に「口」を持つ〔記〕であると考える。

ここで先の文に〔記〕を入れ、読み下してみる。

已上、百八十四年、年号にして卅一代の年号を記す。只し、人の傳えに有るのは、「大寶自り、年号を立て始めた」と言うこと而已である。

つまり、年代歴の著者は「以上のように、184年間、31代の年号を記載したが、(これ等の年号は日本書紀等の国史書には無くて、)世間の人が伝えている事は、大宝(年号)より年号は始まったという事だけである。」と注意書きをしたのである。

4. まとめ

『二中歴』前田家写本には、古新二種ある。

古写本は三条西家が所蔵していた「三条旧本十四冊」を書写したものであり、『二中歴』原本内容を忠実に再現するものと考えられる。

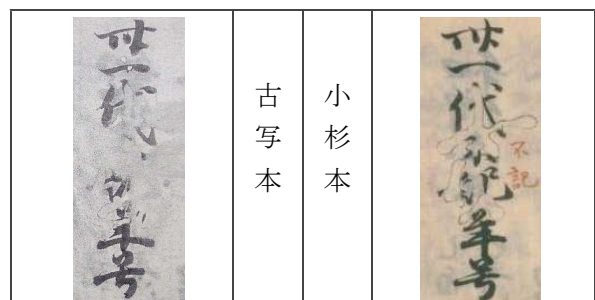
新写本は大炊御門家本二冊(前田家古写本第一と同じ)と実暁本五冊(前田家古写本第二～六と同じ)を書写したものである。

この実暁本は天理図書館蔵『二中歴』五冊であり、江戸初期以降の写本の多くは同本の書写本である。

因って、小杉氏が明治10年に前田家古写本を影写する以前に見たのは実暁本写本の一つであり、その写本にも〔不記〕とあったので、古写本の影写に当たり、古写本欠字部に〔不記〕と記入した。

そして、その影写本が国会図書館蔵本となり、尊経閣文庫所蔵本と異なった「古写本」となったのである。

これ等の経緯より『二中歴』原本の年代歴「欠字」部には「記」と書かれていたと推考する。



激動時代に活躍した外交官 吉士一族を追う

一宮市 畑田寿一

5世紀中頃から7世紀中頃の朝鮮半島は、朝鮮三国志と言われるほど激動の時代であった。

その中であって朝鮮半島、中国と倭国を行き来して外交を担当してきた一族がある。

吉士一族である。吉士一族はマイナーな渡来氏族で武力に優れており、宮中での「吉士の舞」は有名であるが、一族の内の「難波吉士氏」は外交により存在を示してきた。

「難波吉士氏」の本貫は文字通り「難波」であるが、九州、任那にも拠点があり、各々の政府に密着して活動をしてきた。

上記の2百年の間に『日本書紀』には約40名の吉士一族の名前が散在する。朝鮮半島の動きと吉士の活躍を繋いで眺めてみることで、時代に翻弄されながら歩んだ彼らの足跡を拾ってみたい。

1 高句麗の台頭と百済の滅亡

高句麗は広開土王の時代（在任：391～412年）に領土の拡大を図り、396年には百済を隷属化した。このため、397年には百済は倭国に支援を要請し、400年代には高句麗、新羅、百済、倭が覇を競うようになった。

吉士が日本書紀に現れるのは、子の長寿王が、百済の蓋鹵王を下して百済を滅亡（475）に追い込む前後で、日鷹吉士、吉士老、調吉士などが関係各国を飛び回り情報収集に活躍している。

2 新羅の台頭

532年に任那南部の金宮国が新羅に滅ぼされると、朝鮮内の混乱は倭にも直接影響が及ぶようになり、551年、新羅が高句麗に代わって漢山地域を占有し、562年に加羅諸国を併合すると任那の存在が危なくなってきた。

倭は、一貫して百済の救援、任那の復活を図ってきたが、新羅の態度が一定せず、振り回さ

れる結果となった。600年ごろには、倭は各国から調を取り立てるほどの地位を確保したが長続きはしなかった。

このころの吉士一族の活躍は目覚ましく、交渉のため各国に何度も派遣されている。

3 遣隋使

600年に九州の多利思北孤^{*1}が随に使者を送り、隋との外交を打診したところ良好な感触を得たので、607年に小野妹子を大使とした遣隋使を送ったが、持って行った国書に「日出ずる天子云々」の記載があり、煬帝の怒りを買ってしまった。

しかし、煬帝は冷静であった。早速、裴世清に倭国の調査を命じた。魏の時代、卑弥呼の使者に百枚の銅鏡を渡して同盟を結び、呉を挟み撃ちにすることにより、呉の動きを牽制した故事に倣おうとしたのかもしれない。

608年、裴世清が筑紫に到着すると吉士雄成が出迎えの任あたった。

裴世清は多利思北孤に会い、煬帝の意向を伝えるとともに、倭国が希望する学僧の受け入れを許諾した。

倭国側の派遣準備が整う間、裴世清は九州各地を廻り、いろいろな情報を中国に伝えている。都に城壁がないなど軍事的な意味合いをもつ内容も含まれていることから調査目的が多岐に亘っていたことが伺われる。

608年渡航の準備ができると、吉士雄成は随行員として渡航した。

4 遣唐使

遣唐使は、630年に犬上御田鎌を送ることにより開始された。

632年、遣唐使の帰国に同行してきた高表仁の接待のために、吉士小槻、八牛が対応し、さらに高表仁の帰国に際しては、吉士雄麻呂、黒麻呂が対馬まで同行している。

以降、2次、3次、4次にも吉士一族の関係者が同行しているが、激動する大陸の動向調査が目的であったと指摘する歴史家が多い。

*1 多利思比孤 「比」原作「北」（中華書局版『隋書』1826頁脚注）

5 朝鮮半島の状況調査

630～640年代の朝鮮半島は目まぐるしく勢力分布が変化し、日本は吉士磐金、水鷄、真跡、長兄らを百済、新羅、任那に送り状況把握に努めた。

6 白村江の戦い

戦争準備を隠すため、唐は4次遣唐使（659）を洛陽に足止めした。いよいよ風雲急を告げる中、661年に九州まで出兵した斉明天皇が急死した。大和王朝側の朝鮮出兵に対する内紛が原因と言われている。

一方、九州勢は朝鮮半島の鉄資源の確保のため戦争に突き進んだが、兵力の差とリーダーの不足から倭国は663年に大敗を喫することになる。

唐側は、最初に郭務宗が、次には劉徳高が254名を引き連れて九州を訪れた。

しかし、唐側も倭国を統治するメリットは少なく、国内的にも則天武後の台頭などを抱えており、百済の捕虜を中心とした2千名を送り込むにとどめた。これが、難民か駐留部隊かは意見が分かれるところであるが、統治するには規模が小さ過ぎる。

だが、参戦した地方の豪族の恐怖は大きく、挙って防御のための築城を急いだ。

一方、日本側も九州勢の代わりに参戦しなかった大和王朝が交渉にあたり、戦後処理のために665年から3次に亘る遣唐使を派遣した。

この時期、唐の特使（劉徳高）への対応、戦後処理のための遣唐使の随行員として、吉士岐彌、針間らが活躍している。

一方、新羅との関係は吉士小鮪などの活躍により、668年には両国間で贈り物をやりとりする段階まで回復した。

しかし、中国との国交正常化は中国側の事情により、702年の栗田真人らによる遣唐使まで待たねばならなかった。

7 まとめ

外交を行っていたのは吉士氏だけではないが、各場面で重要な役割を担っていたことは確かである。

中国側は、『旧唐書』によると「日本には2つの国があり、白村江の戦い以前は九州王朝が中

心で、以降は大和王朝が中心になった。」と認識したようであるが、両者の関係を「唐を訪れた日本人に聞いたけれども要領を得ない」と記載している。

『日本書紀』では、外交の全ては大和王朝が行っていたと記述がされているが、実際には朝鮮半島との外交は両王朝で行い、中国とは九州王朝が中心であったと思われる。

しかし、協調が取れていたとは思えない局面もあり、混然一体になっていたのではないかと。

「ニギハヤヒ命」考

名古屋市 佐藤章司

1、はじめに

『古事記』には、一種、疑惑の霧がかかっている説話がある。それは、神武記の紀伊半島横断である熊野から橿原までのルート上の行動であり、ニギハヤヒ命の出現である。以下はその説話内容から見た疑問の検討及び結果である。

なお、本稿は『東海の古代』第194号（2016年10月）掲載の「神武天皇の熊野からの侵入譚の検証」から得た認識をもとに、焦点をニギハヤヒ命及びその子孫の物部氏に絞って考察した。

2、記紀説話から

A

かれ、ニギハヤヒ命参赴きて、天つ神の御子に白さく「天つ神の御子天降り（注1）ましぬと聞きしかば、追ひて参降り来つ」とまをして、即ち天つ瑞を献りて、仕へ奉りき。かれ、ニギハヤヒ命、登美毘古が妹登美夜毘売を娶して生みし子、宇摩志麻遲命（注2）。こは物部連・穂積臣・姦臣の祖なり・・・『古事記』

B

昔、天神の御子が天磐船に乗って天降（注3）られました。櫛玉ニギハヤヒ命といます。この人が我が妹の三炊屋媛を娶って子が出来ました。名を可美真手命（注4）といます。それで手前はニギハヤヒの命を君として仕えていま

す。一体天神の子は二人おられるのですか～」～（略）～ニギハヤヒの命はもとより天神が深く心配されるのは、天孫のことだけであることを知っていた～これをほめて寵愛された。これが物部氏の先祖である・・・『日本書紀』
（アンダーライン及び注1～4は佐藤が加筆。以下同様）

上のA・Bの説話の中で、特徴とする点は以下のとおりである。

Aの「天つ神の御子」やBの「天孫」とは天孫降臨説話のニニギ命のことであって、神倭伊波礼毘古命（神武）を指さない。これは「天孫降臨」時の説話である。それを『古事記』・『日本書紀』とも神武東侵説話の中に盗用し転用している。本来、ニギハヤヒ命の出現は、記紀の記す神武紀の出現ではなく、筑紫におけるニニギ命の天孫降臨時の出現だったのだ。その子孫の物部氏は筑紫を中心とした九州北部を領域として活動した九州王朝中枢の氏族であり、大和王朝の臣下になるのは、もっと時間が経過した七世紀後半の九州王朝滅亡時であろう。（大伴氏や久米氏とも）、神武東侵には同行していないのだから、いつ、物部氏や大伴氏は九州王朝から大和王朝側の臣下になったのかを解明する必要がある。

従来のように、天皇家一元主義古代学では東アジアの中の倭国とは大和王朝のみであり古代から一貫して倭国を支配したのは大和王朝（近畿天皇家）以外にない。との認識では歴史の真相を得られないだろう。それをダメ押しするのが神武天皇の紀伊半島縦走の熊野からの侵入と平定はニニギ命の北九州における平定説話で、「大伴氏や物部氏は九州王朝の臣下であり、筑紫に居た」のである。

次に、物部氏の活躍の様相を若干の事例をあげて述べる。

（1）継体六年（512年）任那四県の割譲

継体紀に次の記事がある。

百済が使を送り調を奉った。別に上表文を奉って任那国の哆唎・哆唎・娑陀・牟婁の四県を欲しいと願った。

哆唎の国守、穗積臣押山が奏上して、「この四県は百済に連なり日本とは遠く離れていま

す。百済とこれらの地は朝夕に通い易く、鶏犬のどちらのものか聞き分けにくいほどであり、いま百済に賜って同国とすれば、保全のためにこれに過ぎるものはないと思います。しかし百済に合併しても、後世の安全は保証し難く、まして百済と切り離しておいたのでは、何年ともたないと思います」と言った。

大伴大連金村も意見に同調され奏上した。物部大連鹿火を勅を伝える使とされた。彼がまさに難波館に出向き、百済の使に勅を伝えようと言う時・・・（略）・・・賜物と一緒に制旨をつけ、上表文に基づく任那の四県を与えられた。

この時の倭国（九州王朝）の大王は、隅田八幡神社人物画像鏡の銘文から、倭の五王に続く日十大王年（中国風一字名で年）と思われる。

上の記事の「**物部大連鹿火**」は九州王朝の中核的な人物である。詳細は『東海の古代』第171号（平成26年11月）掲載の「九州王朝と百済国一任那四県の割譲」を参照されたい。任那の統治と経営の主体は九州王朝であり、大和王朝ではない。

（2）齊明七年（661年）百済救援

①齊明七年（661年）八月、前軍の將軍大花下安曇比羅夫連・小花下河辺百枝臣・後軍の將軍大花下阿倍引田比羅夫臣・**大山上物部連熊**・大山上守君大石・大山下狹井連檳榔・小山下秦造田来津らを百済救援のため、倭国の人質であった百済王子豊璋を百済王にしたうえ、5千人をもって護衛し派兵した。この中に大山上「物部連熊」がいる。大花下・小花下・大山上・大山下・小山下の冠位は九州王朝の制定した制度である。冠位制度に変わって大宝元年三月二十一日の条にある初めての「官名位号」の制定が大和王朝（朝廷）の制度である。

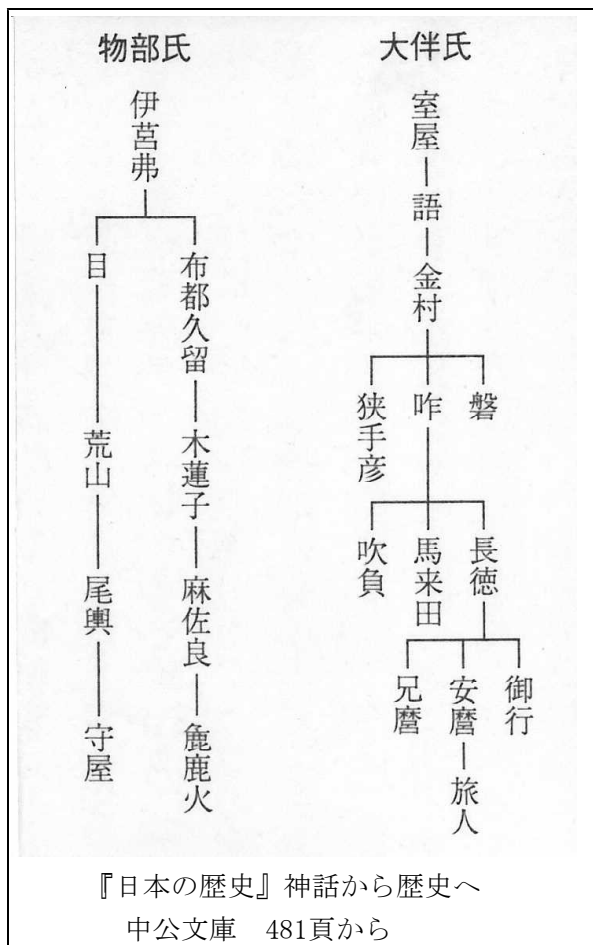
②持統十年（696年）四月二十七日、追大弑（注5）の位を伊予国風早郡の人、「**物部薬**」と肥後国皮石郡の人、壬生諸石に授けた。長らく唐土で苦勞したことを勞われてのことである。

風早郡とあるが、持統十年の行政単位は評であり、郡となるのは大宝律令によって701年からである。評は九州王朝の制度である。つまり、

風早郡とあるのは風早評であり、皮石郡とあるのは皮石評が正しい。持統四年には筑後国の人で大伴部博麻も帰還している。

百済救援や白村江の海戦を主導したのは九州王朝であり、大和王朝は百済救援に参戦していない。

③その他に「磐井の乱の**物部麿鹿火大連**」、「蘇我馬子対**物部守屋**の戦い」等があるが本稿とは別に論じたい。



3、長髓彦

登美的那賀須泥毘古は、登美毘古とは違う人物である。そもそも登美的那賀須泥毘古の支配地は日下であって、登美毘古は東の奈良盆地内にあり支配領域が異なる。即ち、二人の毘古がいる。登美的那賀須泥毘古と登美毘古である。これを『日本書紀』では神武天皇の支配領域を拡大するという意図をもって「登美的那賀須泥毘古＝長髓彦」であると一人に改変している。その際に「登美」は瑞兆の鵝が現れ、鵝の邑と

いったが今は鳥見というのはなまったものであると、「記紀」特有の地名説話を挿入している。これは、宇陀の地で、「鳴鏑の落ちし地を訶夫羅前と謂ふ」と記しているのと同類であり、紀編纂時の挿入である。

4、石上神宮

ニギハヤヒ命は物部氏の祖先と語られ、物部氏の氏神される石上神宮(奈良県天理市)は、記紀に再三登場する由緒ある神宮社であり、この石上神宮の主祭神として、①布都御魂大神、②布留御魂大神、③布都斯魂大神が祭られている。

①の布都御魂大神の神体は、建御雷神がニギ命へ国を譲るよう大国主神に突きつけた剣であり、後に神武天皇(神倭伊波礼毘古命)の熊野の地で困窮した際に神託によって建御雷神から高倉下へ、そして神武へと渡った剣(剣の名はさじふつの神またの名はみかふつの神またの名はふつの御魂)で、困窮を克服する剣である。

②の布留御魂大神の神体は、ニギハヤヒ命から継承された天璽剣である。

③布都斯魂大神の神体は、スサノオノ命が八岐大蛇を退治した際に用いた(尾を切って草薙の剣を取り出した)十拳剣である。

以上の『古事記』の説話にあるように、石上神宮は、説話の中で出現した剣を神体として今に祭っているが、物部氏の始祖とされるニギハヤヒ命が配祀されていない。又、神話世界とこれらの剣がセットとなって語られ、本来の在り処は、出雲であり筑紫であって大和の地ではない。それが大和にある石上神宮に所在する不思議さである。これは筑紫の地にあったものが九州王朝滅亡時に大和に齎されたものであろう。

大伴氏は、九州王朝滅亡後に大和王朝に取り込まれ、大伴旅人や大伴家持のように存続するが、大伴氏とともに古代を飾った物部氏は、九州王朝を滅ぼした大和王朝の存在を拒絶したのではなかろうか、そして各地に飛散し、歴史のかなたへ消えていったのであろう。

それに、もうひとつ、古代史の中でもとりわけ眼目なものとして、この神宮所有の特異な形態をした「七支刀」がある。この剣が何故この石上神宮に存在するのか、その由来が語られて

いない。

銘文には次のとおりある。

<表> 泰和四年五月十六日丙午正陽造百鍊鉄
七支刀■辟百兵宜供侯王■■■■作
<裏> 先世以来未有此刃百濟王世子奇生聖音
故為倭王旨造伝示■世

(■は不明な文字)

『邪馬壹国の論理』(古田武彦著、ミネルヴァ書房、2010年)によれば、倭王旨の存在が明らかにされているが、これはニギハヤヒ命と共に九州王朝の隠蔽目的のために秘蔵されたのであろう。なお、同著によれば、泰和四年は、西暦369年である。

(注1)(注3) 天降

「天降る」とは、天国(対馬島と壱岐島を中心とした領域)を原点として天国の領域から新たな支配地に行くことであり、その経路は、おおむね、①天国から出雲へ、②天国から筑紫へ、海上を進むことである。これを具体的に示すものが天鳥船や天磐船である。

①『古事記』の天国から出雲へ天降る例

- ・スサノオの命を出雲の斐伊川の鳥髪へ追放
- ・天のほひの神の国譲り交渉—1
- ・天の若ひこの国譲り交渉—2
- ・建御雷の神の国譲り交渉—3

②『古事記』の天国から筑紫へ天降る例

- ・ニニギ命が筑紫の日向の高千穂のくじふるだけに天降る。

③『日本書紀』の例

- ・天神の御子(ニギハヤヒ命)が天磐船に乗って天降られました。

天国から海岸のない大和に天磐船に乗って辿り着くことなど出来るはずがない。これは神武天皇の東侵時代のことではなく、ニニギ命の降臨説話からの転用であり大和ではなく北部九州と考えればリアルになる。

①や②は、天国を原点とする言い方であって、神武達が筑紫から安芸・吉備・大和へ東侵したことを「天降る」とは言わない。

詳しくは『東海の古代』第194号(2016年10月)掲載の「神武天皇の熊野からの侵入譚の検証」を参照いただきたい。

(注2)(注4) 宇摩志麻遲命、可美真手命

記紀ともに物部氏の祖先とされ、また石上神宮もまた物部氏の祖先であると伝えられている。主祭神は、布都御魂大神・布留御魂大神・布都斯魂大神であり、配祀神として宇摩志麻治命・五十瓊敷命・白河天皇・市川臣命があるが邇芸速日命は祭られていない。石上神宮の公式サイトでは、宇摩志麻治命が「当神宮祭主物部氏の祖神」と仰がれていますとされます。

『古事記』には「邇芸速日命が登美毘古の妹の登美夜毘売と結婚なさって、お生みになった御子は、宇摩志麻遲命です」と記述されているが、ニギハヤヒ命は天孫降臨時の時間帯に生きた人間であり、神武天皇の大和侵入時の時間帯の人間ではないので、この記事は、古事記編纂者による挿入されたものである。このように理解すれば石上神宮は本来、天孫降臨の地の筑紫にあるはずで、その解明は今後の課題である。

(注5) 追大弑

追大弑は天武14年(685)の「冠位48階」の35階位であり、九州王朝の制定したものである。国分松本遺跡出土の木簡の表に「嶋評」が、裏には「進大弑」の表記があり、出土地・行政単位の評・冠位の進大弑が記され、この「冠位48階」は九州王朝の制定したものだと思われる。

建元・改元(1)

瀬戸市 林 伸禧

1 建元・改元の意味

『大漢和辞典』では、次のとおりである。

- ・建元：年號を制定する。紀元。
(『大漢和辞典』4巻654頁)
- ・改元：改めて元年をたてる。年號をあらためる。
(『大漢和辞典』5巻471頁)

2 中国

日本と交流があった古代中国の王朝の建元・改元記事は、表1のとおりである。

表1 中国の「建元・改元」記述例（前漢～唐）

国名	前朝	国の位	建元・改元
前漢	—	建元	其後三年 有司言元宜以天瑞命 不宜以一二數 一元曰 建元 二元以長星曰元光 三元以郊得一角獸曰元狩云
新	前漢	篡奪	其 改正 朔……以十二月朔癸酉為建國元年正月之朔
後漢	新	建国	建元 為建武（内乱を統一）
三国	魏	後漢	禪讓 改 延康為黃初
	蜀	—	建国 改 年（後漢の後継国として建国）
	呉	—	自立 改 年（自立して、魏・黄初3年を黃武元年に改元。皇帝に即位して、黃龍元年に改元）
晋（西晋）	魏	禪讓	改 元
南朝	東晋	—	建国 改 元（西晋・愍帝が降伏したので晋王として自立し改元。帝が殺害されたのを知ったので、晋（東晋）として建国）
	宋	東晋	禪讓 改 晉元熙二年為永初元年
	南齊	宋	禪讓 改 昇明三年為建元元年
	梁	南齊	禪讓 改 齊中興二年為天監元年
北朝	隋	周	禪讓 改 元
唐	隋	禪讓	改 隋義寧二年為唐武德元年

- ※1 建元は、中国最初の年号である。景帝の死後、皇位を継いだ武帝の年数は、単に元年・2年・3年とだけされていたが、後に各年代に名称を付けることが建議され、さかのぼって、この年代は「建元」と名付けられた。
- 2 新・王莽は、平帝が崩御すると自らが『仮皇帝』を自称、そして自分が皇帝となる根拠が記されている書物を捏造して、皇帝となる。

これらから、前王朝から禪讓で建国した場合には、年号は「改元」としている。また、禪讓でなくても前王朝を引き継いだとしている王朝では、改元としている。前王朝に関係なく自立・建国した場合には、年号は建元としている。（例外：三国時代の呉、改年と記述した理由不詳。）

建元・改元の意味が明確である事例では、隋末・唐初期の内乱時での建元・改元である。

各地域で自立又は建国している場合は、全て年号を建元と記述されている。唯一、唐・高祖（李淵）のみ隋・恭帝から禪讓を受けたので、改元と記述されている。（表2参照）

詳しくは、別表を参照されたい。

表2 隋末から唐初期での「建元・改元」

区分	創設者	略・稱	旧唐書記事
禪讓	改元	高祖（李淵）	唐（皇帝） 帝紀 改 隋義寧二年為唐武德元年
建国	建元	竇建德	長樂王 帝紀 年號丁丑（※『新唐書』 建元 丁丑）
		王世充	鄭（皇帝） 列伝 建元 曰開明
		李子通	呉（皇帝） 列伝 建元 為明政
		梁師都	梁（皇帝） 列伝 建元 為永隆
		林士弘	楚（皇帝） 列伝 建元 太平
		蕭銑	梁王（皇帝） 列伝 建元 為鳳鳴
自立	建元	薛仁果	西秦霸王 列伝 建元 為秦興
		李軌	河西大涼王 列伝 建元 安樂
		高開道	燕王 列伝 建元 法輪
		劉黑闥	漢東王 列伝 建元 為天造
		沈法興	梁王 列伝 建元 曰延康
		李子和	永樂王 列伝 建元 為正平
		劉武周	皇帝 列伝 建元 為天興
		高曇晟	大乘皇帝 列伝 建元 為法輪
朱粲	楚帝 列伝 建元 為昌達		

※唐・高祖（武德元年夏五月）**甲子 高祖即皇帝位於太極殿 命刑部尚書蕭造兼太尉 告於南郊 大赦天下**

3 日本

古代日本における「建元・改元」記事は次のとおりである。大宝元年は建元と記述されているが、建国の状況が判然としない。

次回、それらの状況について述べる。

(1) 改元

『日本書紀』

- ・孝徳即位前紀条 **改**天豊財重日足姫天皇四年為大化
- ・白雉元年二月条 **又**詔曰「……改元白雉」
- ・朱鳥元年七月条 **戊午 改元**曰朱鳥元年

(2) 建元

『続日本紀』

- ・大宝元年三月甲午條 **建元**為大宝元年

「東海の古代」(185号～196号) 目録

号数	発行年月	分類	表 題	連載	頁	著 者
185	28年 1月	論 考	『隋書』を徹底して読む ー東夷伝百濟條・その2ー	2	1	石田敬一
			天氏、尾張氏の時代	5	2	加藤勝美
			欽明天皇と九州王朝	2	5	竹嶋正雄
		その他	「東海の古代」(173号～184号) 目録		9	編集部
ひろば	また古代逸年号を見つけたよ		4	11	石田敬一	
186	28年 2月	論 考	天氏、尾張氏の時代	6	1	加藤勝美
			七支刀の倭王、百濟王世子とは誰か		4	竹嶋正雄
			青森県十三湊における興国の大津波ー産経新聞記事ー(添付:資料1～3)		9	林 伸禧
187	28年 3月	論 考	欠史八代の天皇家を継いだ蘇我氏		1	竹嶋正雄
			中国史料による日本古代史(新訂版)		4	林 伸禧
			天氏、尾張氏の時代	7	5	加藤勝美
			「観世音寺」創建をめぐって		8	山田 裕
			『隋書』を徹底して読む ー東夷伝高麗條(前半)ー	3	10	石田敬一
188	28年 4月	論 考	『新唐書』に記載されている「邪古・婆邪・多尼」の位置		1	林 伸禧
			天氏、尾張氏の時代	8	4	加藤勝美
			「観世音寺」創建をめぐって	2	7	山田 裕
			『隋書』を徹底して読む ー東夷伝高麗條(中段)ー	4	14	石田敬一
189	28年 5月	論 考	推古紀における諸問題 (添付:参考資料)	1	1	林 伸禧
			「観世音寺」創建をめぐって	3	5	山田 裕
			天氏、尾張氏の時代	9	6	加藤勝美
			「年代歴」を分析する	1	8	石田敬一
			『隋書』を徹底して読む ー東夷伝高麗條(中段の2)ー	5	14	石田敬一
190	28年 6月	論 考	「年代歴」を分析する	2	1	石田敬一
			天智天皇の正体		4	竹嶋正雄
			推古紀における諸問題 別表1～4	2	8	林 伸禧
			『隋書』を徹底して読む ー東夷伝高麗條(後半)ー	4	12	石田敬一
		ひろば	古代逸年号を見つけたよ	5	14	石田敬一
191	28年 7月	論 考	九州王朝から分かる九州王朝の営み		1	竹嶋正雄
			拘奴国について	1	6	石田敬一
			『赤淵神社縁起』の「天長五年丙子」の解釈について		8	林 伸禧
ひろば	古代逸年号を見つけたよ	6	14	石田敬一		
192	28年 8月	報 告	「第28回サマーセミナー2016」講座結果 ー教科書が教えない! 邪馬台国の真実!ー		1	石田敬一
		論 考	拘奴国について その1	2	5	石田敬一
			古代逸年号(添付:別紙1・2、別図1、別冊「古代逸年号(未定稿)」)	1	8	林 伸禧
ひろば	古代逸年号を見つけたよ	7	9	石田敬一		
193	28年 9月	論 考	拘奴国について その2	3	1	石田敬一
			天武天皇の不思議		7	竹嶋正雄
			前田尊経閣善本影印集成『二中歴』年代歴の欠字について (添付:参考資料 別紙1～7)		12	林 伸禧
		ひろば	朱儒国について		17	林 伸禧

号数	発行年月	分類	表題	連載回数	頁	著者
194	28年10月	論考	神武天皇の熊野からの侵入譚の検証		1	佐藤章司
			幻の小人・・・コロポックル		6	今井俊罔
			侏儒国について		9	石田敬一
			『日本書紀』年表4（添付：別冊『日本書紀』年表4）		12	林 伸禧
			拘奴国について	4	13	石田敬一
195	28年11月	論考	天孫降臨説話と倭健命の死		1	佐藤章司
			美濃国半布里の里の秦人		4	畑田寿一
			「兄弟年号」にかかる『健軍大明神縁起』について		6	林 伸禧
			「年代歴」の法清の細註		11	石田敬一
196	28年12月	論考	九州古代史探訪旅行 その1	1	1	山田 裕
			前田家『二中歴』の経緯と年代歴「欠字」について		3	竹嶋正雄
			激動時代に活躍した外交官吉士一族を追う		6	畑田寿一
			「ニギハヤヒ命」考		7	佐藤章司
			建元・改元（1）	1	10	林 伸禧
		ひろば	私が投げかける3つの問題		13	石田敬一

ひろば

私が投げかける問題

その1

名古屋市 石田敬一

<二倍年暦>

- 継体までの天皇の崩御年齢は、1年を365日とする通常の1年を2歳と数える二倍年齢で示されている。とするならば、それは「二倍年暦」ではなく、正確には、暦年は「一倍年暦」で年齢の数え方は「二倍年齢」ではないのか。
- 光武帝から印綬を賜わったのは、冊封体制に組み入れられた証ではないのか。冊封体制下で、倭は中国の暦と年号を受け入れているのではないのか。それは一倍年暦ではないのか。
- 中国の冊封体制下にあつて、暦も年齢も二倍で数える「二倍年暦」が倭に存在できるのか。中国の冊封体制下に置かれた時から、倭は中国との外交のためには中国の暦と同一にせざるを得なかったのではないのか。
- 『魏志』倭人伝や倭の五王の時代は、中国の冊封体制下であり中国の暦と同じ一倍年暦ではなかったのか。
- 『魏略』脚注の「倭人は正歳四節を知らず、但々春耕秋収を計って年紀と為す」は、稲作作業の節目である春耕と秋収で年齢を数えるということではないのか。それは「二倍年齢」ではないのか。
- 春耕秋収で一年を二期に分ける農事暦は中国から伝わったのではないのか。紀元前2700年頃の三皇五帝の一人、医療と農耕の術を教えた炎帝神農は、120歳まで生きたとされる。これは古い時代の中国には、1年で2歳を数える農事暦があつたことを意味しないのか。それが農業とともに倭にもたらされたのではないのか。
- 『三国志』の夫餘伝、高句麗伝、濊伝、馬韓伝には、正月や農事の節目に天を祭り歌舞飲食したことが記述されているのに対して、倭人伝の「人性嗜酒」の注釈に、裴松之が「其俗不知正歳四節但計春耕秋収爲年紀」を付け加えた意味は、倭人は酒をたしなむ風習があるが、中華や東夷諸国が正月や農事の節目を祭り歌舞飲食する風習とは違い、ただ単に歳を数えるのみであるから注釈されたのではないのか。
- 倭において長年使われてきた春耕秋収の二倍年暦（農事暦）をただちに一倍年暦に切り替えられるものなのか。

外交は中国の一倍年曆に従い、国内では二倍年齢として引き続き使われたのではないのか。

9 万一、倭が継体まで二倍年曆を使用していたと解釈した場合に、中国との外交記事の年代と整合性がとれるのか。

10 継体までは「一倍年曆・二倍年齢」で、継体以降は名実ともに一倍年曆で暦も年齢も一倍になったのではないのか。

前回の例会の内容

■ 天孫降臨説話と倭建命の死

名古屋市 佐藤章司

天孫降臨の地は「説話」と「遺跡や遺物の物証」が一致している九州北部である。そして紀紀共に、倭建命の死に天皇・皇后にのみ使われる「崩」の文字を使用していることなどから、ニニギ命の死は倭建命の死に盗用され転用されていると考える。

■ 美濃国藩布里の里の秦人

一宮市 畑田寿一

日本最古の「半布里」の里の戸籍により、渡来人の秦氏について考察した。

美濃国関地方は、5～8世紀において製鉄などの産業・文化の中心地であり、半布里は秦人のベットタウン的な地域になっていたのではないかと推測する。

■ 「倭国年号」について

瀬戸市 林 伸禧

『古代に真実を求めて』第20集では「失われた倭国年号《大和王朝以前》」をサブタイトルとされる。一般的には「倭国年号」とすると大和王朝の年号と誤解される恐れがあり「九州年号」を「倭国年号」とするのは問題が大きいと考える。

■ 天武天皇の不思議(2)

一宮市 竹嶋正雄

9月例会において、大海人皇子が九州王朝の皇太子であることを示した。10月例会では白村江で敗れた大海人皇子が天武天皇となった経緯を示した。天武は、天智崩御の後、近畿九州政権樹立のために壬申の乱を起こし即位し、その後、唐との国交再開の為に国史書を作らせた。その国史書が、出自隠しと皇位継承の正当性を表した『日本書紀』である。

■ 「年代歴」の法清の細註

名古屋市 石田敬一

法清の細註にある唐渡僧善知は、『遼史』の大康九年に登場する僧善知であり、その細註の内容は、「年代歴」編纂時期の頃に僧善知が「法清の時代に法文が文書になった」と伝えた記事と解釈する。

例会の予定など

■ 今月の例会

(1) 日時 12月18日(日) 13:30～17:00

(2) 場所

名古屋市市政資料館 第5集会室

名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051

(3) 参加料 500円 (会員は不要)

(4) 交通機関

・地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分

・名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分

・市バス「市政資料館南」、北徒歩5分

・市バス「清水口」、南西徒歩8分

・市バス「市役所」、東徒歩8分

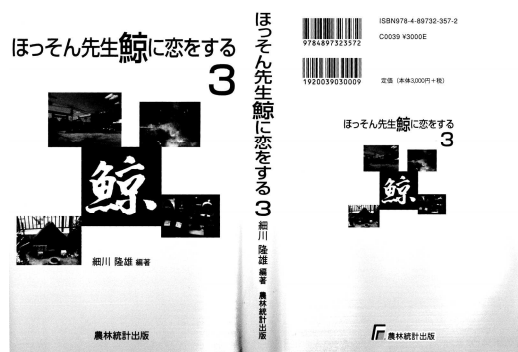
(5) 駐車場 市政資料館：12台+α 収容(無料)

■ 来月以降の例会日

1月15日、2月19日、3月12日

「古田史学の会・四国」の合田洋一氏から『ほっそん先生鯨に恋をする』3(細川隆雄著、農林統計出版)の書籍の贈呈がありました。合田氏の講義内容が収録されています。

会員に貸し出します。



■ 次の会報誌の投稿締切り

12月30日(金)

投稿先: furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会で発表する際は資料を25部用意ください。